

Title

内発的発展論における「キー・パースン」の創造性の応答的生成過程—潜在的実在に着目した地域実践記述試論—

Name

村上 竜雄

抄録

本稿は、内発的発展論の中核的概念である「キー・パースン」の創造性をいかに記述しうるかという理論的課題に取り組み、創造性を制度的評価や個人の資質ではなく、関係のなかで生成される出来事として捉え直す「生成論的転回」を提起する試論である。

キー・パースン概念は、哲学者の市井三郎が「歴史的必然性」に抗して意志をもって参与しようとする例外的諸個人として構想したものであり、鶴見和子はこれを地域の名もなき実践者の創造性を照射する枠組みとして継承した。地域社会実践の事例研究において、重要な役割を果たしてきた同概念であるが、その一方で、語りや制度的評価の過程において特定個人が英雄化され、創造性が顕在的成果やリーダーシップへと還元される傾向をはらんできたことは否定できない。

こうした構造的問題を批判的に検討しつつ、本稿は創造性を環境・歴史・他者との交錯のなかで立ち現れる出来事的実在として再定位し、その生成的過程を捉えるための記述方法論を提示する。理論的基盤として、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの有機体の哲学、および、イザベル・ステンゲルスの応答的世界観を参照し、記述行為を出来事の網の目に参与しつつ意味を共に生成する倫理的実践として再定位する。さらに、批判的実在論の視座を導入し、創造性を直接観察可能な現象の背後で作用する潜在的実在として捉え、アプダクションとリトロダクションによる推論過程を方法論的基盤として位置づける。

事例分析では、著者が参与する人材育成事業を事例に、構造的記述の意義と限界を明らかにしたうえで、記述者の参与を通じた応答的記述の可能性を検討する。その結果、実践者に内在する感受の契機に着目することで、創造性が倫理的応答として立ち上がり、関係的発火を媒介として共に生成される創造性の動的過程が明らかとなった。

キーワード：キー・パースン、内発的発展、批判的実在論、応答的記述、生成論的転回

Title

The Responsive Genesis of Key-person Creativity in Endogenous Development: A Descriptive Inquiry into Regional Practice Focusing on Potential Reality

Name

Tatsuo Murakami

Abstract

This study explores the theoretical challenge of describing the creativity of 'key-persons', a central concept in endogenous development. It proposes a generative ontological turn that redefines creativity not as institutional recognition or an individual attribute, but as an event emerging through relational processes. The key-person was originally conceived of by philosopher Saburō Ichii as an 'exceptional individual' acting wilfully against historical determinism, and that concept was later inherited by Kazuko Tsurumi as a lens to illuminate the creativity of anonymous local practitioners. Although this concept has played a significant role in regional practice studies, it has also tended to heroise particular individuals through narratives and institutional evaluations, thereby reducing creativity to visible outcomes or leadership.

While critically examining these structural issues, this paper repositions creativity as an eventual reality emerging at the intersection of the environment, history, and other forces, and presents a descriptive methodology for capturing its generative process. Drawing on Alfred North Whitehead's philosophy of organisms and Isabelle Stengers's responsive ontology, this study reframes description as an ethical act of sense-making within the web of events. From a critical-realist perspective, creativity is understood as potential reality—a causal stratum underlying observable phenomena—while abduction and retrodiction serve as methodological foundations. The empirical analysis examines a human resource development project involving the author as a participant. By focusing on the practitioners' affective moments, this study reveals how creativity arises as an ethical response and unfolds through relational ignition, thus co-generating new possibilities within the relational field of practice.

Keyword: key-persons, endogenous development, critical realism, responsive description, generative ontological turn

はじめに

内発的発展とは、人と人とのあいだに立ち現れる動的な過程である。筆者はこれまで、地域の内部から生まれる協働と学びの往還をその推進力と考え、約5年間にわたって人材育成事業の現場に関わってきた。しかし実践を重ねるほどに、特定の事象や人への注視自体が、創造の過程を取り逃がす構造的な罠をはらんでいることを実感するようになった。

人々の行為や実践を言語化し、既存の理論的枠組みに準拠して把握しようとする試みは、しばしば創造の過程を「成果」や「貢献」といった構造的語彙へと還元してしまう。とりわけ、「キー・パースン」という概念を用いるとき、その逆説は顕著となる。この概念は、哲学者の市井三郎が「歴史的必然性」に抗して意志をもって参与しようとする例外的諸個人として構想したものであり、鶴見和子はこれを地域の名もなき実践者の創造性を照射する枠組みとして継承した。しかし、現実の地域研究では、「誰が」「何を成し遂げた」「どのような人物か」という問い合わせが前景化し、名指された主体に過度に焦点が当たることで、名指されなかった実践や関係が不可視化されるという逆説が生じているのではないだろうか。

本論では、この逆説的状況を超克するため、キー・パースンの創造性を関係のなかで生成される出来事として捉え直し、特定個人に還元されない創造性の生成過程の記述可能性を探求する。

まず第1章では、市井・鶴見の思想的起源に立ち返り、キー・パースン概念に内在する創造性の構造を再検討する。とりわけ、市井の哲学的洞察に影響を与えた¹アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの有機体の哲学と、その実践的転回を施したイザベル・ステンゲルスの理論を手がかりに、創造性を主体の属性ではなく、環境との交錯のなかに立ち現れる出来事的過程として捉える視座を導入する。第2章では、内発的発展論の事例研究を概観し、それらがもつ意義とともに、構造や制度に焦点を当てた記述の限界を確認する。そのうえで、創造性の探究を生成論的理解へと展開する必要性を示し、応答的記述の方法論的基盤を検討する。そして第3章では、与論島の人材育成事業をフィールドとし、キー・パースンの語りと実践を、まず構造的枠組みにおいて記述²したうえで、参与に基づく応答的記述によって非顕在的契機を可視化し、創造性が関係のなかでいかに立ち上がるかをあとづける。最後に、得られた知見を総括し、構造的記述と応答的記述の相補性、ならびに記述に内在する倫理的課題について考察する。本稿が提示する視座は、既存の構造的記述方法論を否定するものではない。それを前提としながら、創造性の動的生成を補完的に描き出す生成論的転回を提起するものである。

1 創造性の生成論的転回と分析枠組み点

1-1 キー・パースンの創造性の生成論的視座

市井のキー・パースン概念は、歴史的法則性のもとで創造的主体性を發揮し、社会変革を協働的に実現する複数の主体³として構想されたものである。その概念を理解する鍵は、彼の哲学的・倫理的課題意識にある。市井は、マルクス主義に学びつつも、社会変動の契機を歴史的決定論に委ねるのではなく、それを超克する個人の倫理的主体性に変革の契機を見出そうとした。この視座は、「個人歴史性と社会歴史性の結節点」を探ることを生涯に渡る課題として探究した鶴見（1997）の思索とも深く響き合っている（p.10）。

両者の差異は、市井が変革を歴史的な視座から巨視的・思想的に捉えていたのに対し、鶴見（1996）はそれを地域の具体的実践や日常的な変化のなかに見出そうとした点にある（p.215）。さらに鶴見が、「地域」を土着的かつ具体的な実体をもつ単位として考えていた点にも特徴が見出せる。鶴見は玉野井芳郎およびジェシー・バーナードの概念を引き、内発的発展の単位としての地域を「定住者と漂泊者と一時漂泊者とが、相互作用することによって、新しい共通の紐帯を創り出す可能性をもった場所」として再定義した（pp.24-26）。ここでいう「漂泊者」とは、いわゆる「よそ者」のことである。それに加えて、鶴見は現在で言うUターン者を指す「一時漂泊者」の存在を、社会変動を媒介する重要な存在として位置づけた⁴。

注目すべきは、鶴見が創造性を特定の人物に帰属させず、複数の主体が交錯する関係のなかから立ち現れるものとして捉えようとした点である。鶴見（1998）は精神分析学者のシルヴァノ・アリエティを参照し、デカルト的明晰判明な概念と、その裏側にある「内念（endocept）」——「もやもやしていて、形が定まらないもの」とが結びつくとき、創造性が生まれると述べている（p.426）。この視座に立てば、キー・パースンの創造性は、個人の属性や成果ではなく環境との応答的関係のなかで生成される出来事として位置づけることができる。鶴見（1989）が「小さき民の創造性」（p.59）として捉えようとしたのは、まさにこのような匿名的かつ生成的な民の創造性であったといえよう。

本論では、この視座の転回を「生成論的転回」と呼びたい。すなわち、創造性をすでに存在する個人の資質や静的な成果から捉えるのではなく、それが関係性のなかでいかに生成されているかを問う視座への転回である。この視点は、「誰が」創造的であったかを問うのではなく、創造性が「いかにして」立ち現れたのかという生成過程に事例分析の焦点が移行することを意味している。

しかしながら、内発的発展論の提唱以降に展開された少なくない地域研究において、個人の成果や資質、あるいは制度や集団としての機能に焦点を当てる構造的な記述枠組みが中核的手法として採用されてきた。その結果、特定の主体が地域発展の象徴的存在として過度に顕在化し、実践全体がリーダー的人物像へと収斂する傾向がみられる。このような分析視角は、創造性に内在する応答的連鎖を十分には捉えきれず、関係の中から立ち現れる生成過程を不可視化する危うさをはらんでいる。その傾向は皮肉にも、市井（1963）がキー・パースン概念を構想した際に批判的に退けた「英雄史観」（pp.35-40）と接近するものである。そして、鶴見が「小さき民の創造性」として焦点化した創造性生成の契機は、実践の表象の周縁に退いてしまう。さらに、構造的枠組みによる記述は、制度的な評価指標と結びつきやすく、創造性を静的かつ定型的な成果として捉える力学を強化しかねない。この逆説こそが、創造性の応答的生成過程をいかに記述しうるかという方法論的課題として、本論が再検討を試みようとする核心である。

1-2 応答的世界観と倫理的行為としての記述

前節では、キー・パースン概念の展開において、特定の人物への焦点化が創造性の生成過程を不可視化してしまう構造を確認した。本節はその逆説を超克するために、哲学的・理論的な補助線を引くことを目的とする。

ここで導入するのは、ホワイトヘッドの「有機体の哲学」と、それを実践的に転回したステンゲルスの応答的世界観である。ホワイトヘッドは、主客二元論を前提とする近代的思考を批判し、現実を「出来事」の連鎖として捉え直す哲学を構築した。彼にとって世界は、互いに関係しあう「現実的契機（actual occasion）」によって構成される。ここで重要なのは、この現実的契機が、他の諸契機の影響を受け取り、それらを自らの内部に取り込みつつ新たな意味や出来事を形成するという、生成の過程そのものであるという点である。この生成の根源的な働きは

「抱握 (prehension)」と呼ばれる。ホワイトヘッドにとって、現実的契機は孤立した単位ではなく、関係の網の目の中から立ち上がる出来事の結節点にほかならない。関係のうちにすべての出来事を捉える彼の哲学は、過程的に立ち上がる創造性の理解において重要な理論的基盤となる。

その思想を現代の実践知の領域に展開したのがステンゲルスである。彼女は *Thinking with Whitehead* (2011)において、ホワイトヘッド哲学を現代的課題に応答する思考の技法として展開し、断片化された専門知や権威化された知識に対して、応答的かつ信頼に基づく関係性の再構築を試みている。また近著 *Making Sense in Common* (2023) では、「共に知を創造する」という行為について、それがいかなる倫理的応答を含む営みであるかを問う実践論が具体的に展開されており、その射程は、ホワイトヘッドの宇宙論をメタ理論に据え、人間と非人間との関係性までをも包含するものである。本稿では、ステンゲルスによって実践的転回を施された宇宙論を、暫定的に「応答的世界観」と呼ぶこととする⁵。

この世界観において、すべての実在はそれぞれの「環境 (milieu)」との応答的な関係のなかで意味を形成するものとみなされる。ここでいう環境とは、固定的な外的条件ではなく、関係性が絶えず編み直される場としての世界を指す。各存在はその場において、それぞれの「重要性 (importance)」に基づき応答する関係を選び取り、自己と他者のあいだに新たな意味と価値を生成していく。言い換えれば、何を重要と感じるかという価値観が、そのまま世界との関わり方を決定づけるということである。したがって、この世界観における記述とは、客観的立場からの観察や記録ではなく、記述しようとする出来事への主体的な応答による直接的参与と見なされる。それは、関係の網の目の中から立ち上がる出来事に対して記述者自身もその出来事の一部となり、応答的に関わることで共に意味を織りなす創造的な営みである。その過程において、記述対象にどのように関わるのかが常に問われ続けるという点で、記述行為は倫理的なものとなる。

1-3 創造性の定義と分析枠組み

前節での議論を補助線とし、本論では「創造性」を関係の網の目の中から顕現する出来事的過程として捉える。創造性はあらかじめ主体の内面に属する能力ではなく、実在がそれぞれの環境との応答的関係のなかで、未分化の可能性を新たな形や意味として立ち上げていく生成の過程そのものとなる。この見方において創造性とは、関係そのものを変容させ、世界に新たな秩序が立ち上がる契機となる出来事的実在として位置づけられる。

本論が試みる「潜在的実在」に着目した地域実践記述は、この創造性を分析対象としようとするものである。すなわち、地域の実践において直接的に観察可能な行為や成果のみならず、その背後で潜在的に働く生成の契機を捉えて記述しようとする営為である。本論では、そのための分析枠組みとして、ロイ・バスカーの批判的実在論およびバース・ダナーマークらによる推論モデルを導入する。バスカーによれば、現実世界は「経験 (empirical)」「出来事 (actual)」「実在 (real)」の三層構造をもち、我々が観察できる現象の背後には、不可視の実在層があるとされる。本論が記述しようとする創造性は、まさしくこの実在層における潜在的な働きとして捉えられる必要がある。ダナーマークら (2015) による「アブダクション」および「リトロダクション」を中心とする説明モデルは、その実在層における潜在的実在を探究するための方法を提示するものとして有用である (p.167)。ここでアブダクションとは、経験的な観察を理論的枠組みによって再構成し、新たな仮説的理説を導こうとする推論形式であり、現象の意味を「再文脈化」あるいは「再記述」する手法である。一方、リトロダクションは、その仮説を可能にする構造的条件を遡及的に問う思考であり、観察されないまま作用しているメカニズムとしての実在的要因を析出すことが目的とされる。とりわけリトロダクションの実践において鍵となるのが、「反事実的思考」(p.153) である。

これは、「ある要因 X がなければ、この出来事 Y は生じなかつたのではないか」という問い合わせによって、通常の観察や語りでは見落とされる実在 X の重要性を照射しようとする思考方法である⁶。

ダナーマークらは、これらの推論形式によってこそ、「経験的実在において直接的に明らかにできない関係や構造を見て取ることができる」(p.149) と述べている。本論もこの思考方法に依拠し、語られなかつた創造性を、成果や語りの背後で生成する潜在的実在として捉えようとする。その際、記述者は対象を外部から観察するのではなく、生成の場に参与し、その変化の意味を共に構成する立場を引き受けることになる。ホワイトヘッドのいう「抱握」の概念に照らせば、創造性の記述とは、潜在的実在の痕跡を受け取り、その応答を新たな痕跡として刻む生成的実践、すなわち、創造的な営みにほかならないのである。

本稿は、限られた小論の範囲において、創造性を応答的生成過程として記述する可能性を開くための試論である。その探究の焦点は、特定の事象や人物によって語られた事実自体を追求するものではなく、むしろ文化人類学的な参与観察に立脚し、長期⁷にわたる地域社会との関わりのなかで生起した対話・出来事・気づきの累積を素材として、生成の背景にあるメカニズムを解釈しようとするものである。ここでいう「参与」とは、研究者が外部の観察者ではなく、自らも出来事に応答しながら新たな意味の生成に共に参与する営為を指す。この姿勢は、ティム・インゴルド (2023) が指摘する「存在論から発生論への移行」とも呼応し、創造性を存在論的属性ではなく、生成しつづける過程として捉えようとするものである。したがって、記述は経験的であると同時に省察的な洞察に基づく解釈的営みとなり、その信頼性は、出来事への参与の深度と応答の誠実さによって担保されるべき倫理的なものとして、記述者はその責任を背負うことになる。

2 地域実践におけるキー・パーソン記述の系譜

2-1 内発的発展論の事例研究とその意義

鶴見 (1989) の内発的発展論において、事例研究の蓄積は当初からの課題として位置づけられていた (p.59)。鶴見は上田敏との対話のなかで、自らの播いた種が各論的な成果として実を結んだ研究として、西川潤の『アジアの内発的発展』、佐竹眞明の『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論』、そして松島泰勝の『沖縄島嶼経済史』を紹介している (鶴見・上田, 2003, p.198)。

西川 (2001) は、アジア諸地域の多様な社会的・経済的実践を取り上げ、国家主導の開発モデルに対して地域実践からの視点を提示した。その序文において鶴見の内発的発展論の定義を引用し、いわゆる外発的な「上からの開発に対するオルタナティブを構成するもう一つの発展の諸要件を明らかにすること」(p.15) を目的とした同書は、内発的発展論を抽象的理念にとどめず、事例分析を通して具体化しようとした意欲的な試みであった。「発展事例の背景に横たわる思想と論理を明らかにする」(p.320) と編者が言及したように、同書は各地域での社会変化の展開を論理的にあとづけようとした点に特徴がある。また、佐竹 (1998) はフィリピンの地場産業を対象に、地域住民が既存の経済構造のなかで独自の生産・流通の仕組みを構築していく過程を詳細に描いた。松島 (2002) は沖縄経済の構造を歴史的視野から分析し、「経済思想と開発経済論を結合させる形で」(p.8) 論考を展開した。沖縄の経済通史において一貫して内発的発展が課題とされてきたことを指摘し、「社会運動として島嶼民を指導し、経済政策を生み出し、実施したキー・パーソンの経済思想について考察した」(p.13) 同書は、琉球王国時代から

今までという長期の歴史を分析対象期間としたものであり、沖縄が展望すべきもう一つの道を示した研究であった。

これらの事例研究群に共通するのは、地域社会の発展を、単なる経済成長や外部資本の導入による成果ではなく、地域に内在する社会的・文化的資源の再編成として理解しようとする姿勢である。内発的発展論を具体的な地域の現実に即して検討したこれらの事例研究は、複数地域の事例を比較可能な枠組みとして分析・記述することで、内発的発展の多様性を実証的に示したという点で、その後の地域研究に大きく貢献した。その一方で、多くの研究は地域外部を拠点とする研究者が一定期間の現地調査を通じて観察したものであり、地域社会の変化を主に構造的・客観的視点から分析する傾向がみられる。したがって、地域の内部から当事者として、環境や他者との応答のなかで創造的に立ち上がる変化の過程を描こうとする視点は、まだ十分には展開されていない。

2-2 創造性の探究の理論的転回

本節の目的は、内発的発展論が展開してきたなかで、創造性の理論的探究がいかなる転回を遂げてきたのかを整理し、次章で試みる応答的記述の方法論的基盤を確認することにある。

第1章で言及したように、市井は社会変動を歴史的必然としてではなく、創造的主体性を発揮する複数の諸個人——キー・パーソン (key-persons) ——の実践を通じて協働的に実現されうるものと捉えていた。そして鶴見は、この倫理的主体の構想を、地域社会という土着的かつ具体的な実体をもつ文脈において継承し、個人と社会の相互変容を理論化しようと試みた。鶴見の内発的発展論は第一義として社会変動の理論であり、キー・パーソンは社会的秩序を内側から更新する存在として位置づけられていた。人間と社会が相互に変化する過程を探究しようとするその姿勢は、変革主体となる複数のキー・パーソンが、それぞれの環境とのあいだに織りなす倫理的応答を、創造的変化の源泉と捉えていることを示すものである。

「内発的」や「発展」という共感を得やすい用語が用いられたことにより、鶴見自身が「矛盾をはらんでいる」と留意した「政策としての内発的発展」(鶴見, 1996, p.27)が、社会運動としてのそれよりも広く議論されてきた側面もある。こうした文脈のもとで、北野収 (2008) はその状況を批判的に捉え、社会運動論としての内発的発展論を改めて問い直し、南部メキシコをフィールドに「『オルタナティヴ』を追求しようとする人々や NGO の有様を考察」(p.13)する論考を展開した。また北野は、質的調査、関係者の語り、知的主体としてのキー・パーソン⁸の実践に重きを置きながら、「生命誌論」を展開する中村桂子と鶴見との対話を参照し、人間および自然、生命と社会との相互関係性を視野に入れた存在論的転回の必要性を提示している (北野・西川, 2024, p. 257)。この哲学的視座は、キー・パーソンの創造性を生成論的に再検討しようとする本稿に、従前の事例研究群との理論的な連続性を与えるものと位置づけられよう。

また、米川安寿 (2018) は、内発的発展論におけるキー・パーソンの重要性を主張するとともに、「自己実現的人間としてのキー・パーソン」という視角からその主体性について論じている。ここでは、個人の学びと実践がどのように地域の内側で意味づけられ、主体化されていくのかが検討されており、その形成過程が実証的に照らし出されている。この議論も北野と同様に、地域の社会構造を前提としつつ、個人の内面的な形成過程に焦点を当て、主体の変容と地域との相互作用を解きほぐそうとするものである。

以上のように、市井・鶴見から北野・米川へと展開してきた系譜は、創造性を社会変動の契機として捉える理論的探究を着実に深化させてきた。ここまで概観は、創造性をめぐる理論的探究が、当初の認識論的把握から存在論的視座へ、そして本論における生成論的転回へと連なる理論的水脈を形成していると見なすことができよう。本

論は、この理論的転回を踏まえ、創造性の生成を関係の出来事として捉える視座を展開するものである。

次章では、長期的な参与観察と変革主体の語りを通じて、構造的記述を土台としながら、創造性の潜在的契機を探究し、地域実践において応答的に生成される創造性の可視化を試みる。

3 キー・バースンの創造性の応答的記述

3-1 フィールドと分析的枠組み

分析の対象となるフィールドは、鹿児島県の最南端に位置する与論島⁹における人材育成事業である。同事業は、新型コロナウィルス感染症が拡大し、社会構造や生活様式が激変するなか、多様化・深刻化する地域の課題を産業創出の機会ととらえ、新たな価値を作り出すことができる人材を育成、確保することを企図して構想された。その社会的背景として、「まち・ひと・しごと創生法」（平成 26 年法律第 136 号）の施行以降、いわゆる地方創生の機運が高まり、各自治体も独自の施策を模索していたことが挙げられる。加えて、同島ではこの取り組みに先立つ数年前から、鶴見が「一時漂泊者」として位置づけた U ターン人材による起業や地域活動が注目を集め始めており、地域内に新たな動きが萌芽しつつあった。こうした動向は、鶴見の言葉を借りれば、「共通の紐帯を生み出す場」としての地域のあり方を体現しつつある状況であったと捉えることができる。

同事業の制度設計は、地域住民自身が課題を受け止め、対話と協働を通じてその解決を模索するプロセスを重視し、外部の専門家への依存ではなく、地域の内発性に基づいた支援思想に立脚して構想されたものである。その中核をなす実践型講座は、約半年間・全 10 回の連続講義として構成され、中学生以上の地域住民という幅広い対象者に対して実施されている。講座では PBL (Project-Based Learning) 形式が採用され、フィールド調査、関係者との対話、企画立案、プロトタイプの制作と検証、そして事業企画発表までを一貫して行う。

講座において特筆すべきは「デザインリサーチ」の手法が全面的に採用されている点である。それにより講座参加者は、単なるビジネスアイデアの創出ではなく、課題が生じている現場に深く入り込み、課題の本質を他者との共感を通して洞察することが求められる。いわゆるスタートアップのアクセラレータプログラムのように短期間でビジネスをスケールさせることを主眼にしたものではなく、あくまで「人材を育成すること」¹⁰ が目的として明記されている点も同事業の特徴である。また、自治体だけでなく、地元金融機関や各種関係団体など多様な主体が運営に関与する産官学連携の体制が整えられている。参加者にとって、こうした制度的な支援が新たなつながりを生成する契機となり、課題の共有と解決に向けた協働の場が形成されている点も注目に値する。

以上の概観から、本フィールドは地域社会における内発的発展を支える基盤的装置として制度設計されたものと見なすことができ、分析対象事例としての意義を有している。また、次節以降において取り上げる A 氏は、その初年度の講座受講者であり、修了後も継続的に地域活動を実践する傍ら、コーチを経て現在は講師も勤めている。A 氏の実践は、地域の生活文化や住民との応答に根ざして展開されており、従来の構造的枠組みでは捉えきれない創造性の契機を体現している。その意味において同氏は構造的記述という方法論的限界を照射する存在であり、応答的記述の必要性を示す事例分析がなされるに相応しい対象として位置づけられる。なお、事例分析の実施は、調査目的と記述の利用範囲を事前に説明し同意を得たうえで進めたものである¹¹。

3-2 創造性の構造的可視化

本節では、前章で理論的に整理した「創造性の応答的生成」という視座を、地域実践の具体的な記述を通じて検討する。焦点を当てるのは、地域のなかで長期にわたり多様な実践を展開してきた実践者A氏である。ただし、本論における記述の目的はA氏の個人的経験の列挙ではない。A氏という媒介を通して、創造的変化がいかに関係の内部で立ち上がり、地域社会の秩序や連関を更新するのか、その端緒を捉えることにある。特定の個人に還元されない創造性の生成過程を対象とし、その記述可能性を探究する本論において、A氏は複数存在するキー・パーソンの実践のなかに生起する変化の契機を鮮明に映し出す媒介的主体の一人として位置づけられる。ホワイトヘッドが論じたように、世界は個々の現実的契機を通じて生成し続けており、創造的変化は常に局所的な出来事として立ち上がる。したがって、A氏を分析の焦点とすることは、特定個人を地域の代表として取り上げることではなく、創造性の潜在的実在が顕現する一つの出来事を、関係的生成の視点から追う方法論的選択である。

また、記述内容は逐語的な再現ではなく、長期の関わりのなかで生じた対話・出来事・気づきを素材に再構成されたものである。ここでの記述は、単なる「調査データ」の提示ではなく、出来事への参与を通じて生成された応答的理解の記録であり、その信頼性は、外在的客観性ではなく、出来事への関与の深度と応答の誠実さによって支えられていることを留意しておきたい。

ここではA氏の語り¹²に着目し、鶴見が提示したキー・パーソンの三つの条件——(1)伝統の再創造、(2)歴史的選択性、(3)不条理な苦痛の軽減——(鶴見, 1996, pp.231-233)から照射してA氏の実践を記述してみたい。

A氏は、看護師として都市部で約10年間勤務したのち、子育て環境の困難を契機として帰郷し地域医療に従事するようになった。島に戻った同氏は、実家に子供を預けて地元の病院で勤務を再開し、第二子にも恵まれ「仕事をしながら必死に子育てを続けていた」。しかし、地域医療における制度的課題や医療・福祉の現場における限界に直面し、自らの役割を再考するようになる。とりわけ、新型コロナウイルス感染症拡大による入院患者と家族との断絶がもたらす影響を目の当たりにしたことなども重なり、「看護の専門性は病院に集まるのではなく、家庭に還元されるべき」という想いを強くしたという。こうした気づきは、同氏自身のライフ・ストーリーにおける選択として、医療従事者の立場から地域社会へのアウトリーチ型の支援活動へと軸足を移す契機となった。そして同氏の活動は、後日、構造的な課題解決へ向けた「訪問介護事業」創設の呼び水となるなど、地域社会における具体的な成果としても結実している。同氏の選択は、鶴見の重視する地域の漸進的な内発的変化における一つの契機と捉えることが可能であり、また同氏の人生において重要な契機となったが、地域のゆくえを決めるような歴史的な選択性とまでは言い切れない部分もある。むしろそこに見られるのは、日常の困難や不条理に対して自身の関わり方を不斷に見直していく倫理的主体性であり、そこから創造性の発露が生じている。

地域課題の解決を目指す実践型講座の案内を目にしたA氏は、それが自ら抱えていた課題を乗り越える手がかりになるという確信を抱き、仕事を退職する覚悟をもって参加を決意したのだという。参加当初は専門用語や抽象的概念に戸惑い、十分に理解できぬまま睡眠不足のなか復習と準備に追われる日々が続いたが、地域への問題意識を共有する仲間との協働を通して困難を乗り越えていった。やがてA氏は、「人生を自然に最後まで生きる(one's natural life)」という事業コンセプトを見出し、それをもとにした企画は最終発表で入賞を果たす。結果的に自治体からの支援を受けることとなったが、A氏自身は「たとえ受賞できなくても実践するつもりだった」と語っている。医療現場で直面した「不条理な苦痛」を少しでも軽減し、地域住民が安心して暮らせる社会の実現をめざして、職を辞して活動に専念するA氏の姿は、鶴見が特徴づけたキー・パーソンの条件と響き合うものである。

講座修了後、A氏は自治体からの伴走支援を受けながら、自身の提案した事業を実際に立ち上げた。しかし、現

実は計画通りには進まなかった。同氏は講座の準備段階でデザインリサーチを行い、地域課題を捉えたモデルを組み立てていたが、実際の現場では、地域住民、とりわけ高齢者層のニーズは想定とは異なるものであった。地域の高齢者は、健康への意識は持つてはいるものの、同氏の提供する講座型の予防教育には関心を示さず、むしろ雑談や身体を動かす軽い運動の合間にぽつりとこぼされるような生活上の困りごとへの即応的な対応が求められていたのである。

このような予期せぬギャップを前に、同氏は自らの活動内容を繰り返し練り直し、地域住民との対話を重ねながら事業企画をシフトさせていく。たとえば、当初は座学形式で展開する予定であった生活習慣病予防講座は、高齢者の集中力や身体的特性等に配慮し、雑談を基軸とした「おしゃべりの場」での学びに置き換えられた。また、生活支援の一環として導入を検討していたデジタル技術の活用についても、一方的に教えるのではなく、近隣の高齢者がスマートフォンを使えるようになった成功事例を共有しながら「わたしもやってみたい」という気持ちを引き出すような働きかけを重視するようになった。こうした同氏の実践は、固定化されたモデルの導入ではなく、既存の生活文化や慣習といったコミュニティの文脈に根ざして活動内容を柔軟に再編成し、住民の創造的関与を促す実践へと展開したものである。そのプロセスは、鶴見が提起した「伝統の再創造」の概念に照らして評価することも可能である。また同氏の実践は、地域に蓄積された経験知や相互扶助の文化を外部から一方的に変革するのではなく、対話と応答を通じてその価値を再認識し、新たなかたちで活かそうとする方法論¹³と見なすこともできよう。

こうして A 氏の実践を鶴見の三つの条件に照らし構造的に分析してみると、要件と実践が確かに交差しているように見える。しかし、同氏の行為は日々の活動を通した環境との関わりのなかで、他者の声や出来事に応答し続けるうちに漸進的に形づくられたものであり、その有機的に連なる実践を分解して画一的なキー・パースンの条件に明確に当てはめることは難しい。ここまで構造的記述によって、個人の成果やその資質、人物像、社会との関係性、ならびにそのなかでの選択的行為の実践については一定程度顕現されている。しかしその一方で、A 氏以外にも複数存在するキー・パースン、もしくは、条件に合致しない地域の内発的な社会変動に関与する多くの諸個人によって生起される創造性は十分には描き出されていない。構造的枠組みは創造性の重要な側面を示す有効なレンズであると同時に、そこからはみ出すことでこぼれ落ちる出来事や、分析されるべき対象さえも見逃す危うさをもはらんでいるのである。

無論、地域におけるすべての関係性や小さき実践すべてを記録し言語化することは現実的に不可能である。しかし、すべての個人や実践をつぶさに調査することは叶わざとも、創造性の契機を担う諸個人への洞察を通して、その生成過程に潜在する実在を捉えることはできるのではなかろうか。

3-3 応答的記述による創造性の可視化

本節では、第 1 章で論じた理論的視座に立ち、前節で捉えきれなかった創造性の生成契機に焦点を当てる。ここで採用するのは、記述者自身が地域実践に参与し、地域のメンバーシップのなかで交わされた語りに応答しながら出来事の意味を言語化していく応答的記述の方法である。したがって、本節の目的はインタビュー¹⁴の体系的整理ではなく、関係のなかで生成される創造性を、記述の実践を通して浮かび上がらせることにある。

以下、A 氏の語りの中に潜在する創造性の応答的生成過程を、語られた断片や葛藤、揺らぎのうちに現れる微細な兆しに着目することで顕在化することを試みる。

3-3-1 摆らぎから始まる気づき——抱握的違和と応答的生成の端緒

地域医療の場は、多くの患者が顔見知りという状況にある。その現場に従事していたA氏は、コロナ禍における患者の孤立を目の当たりにした危機感と、地域の未来への不安感のなか、自らの思い描く未来像を実現するきっかけを掴みたいという思いに突き動かされるように、講座への参加を決意したという。

本当に家族に愛されていて、家族がお見舞いに来てくれるからこそ、病院でもちゃんとご飯を食べて、元気を維持していた人たちが、コロナによって家族に会えなくなって、すぐに寝たきりになってしまい、歩けなくなって、食べられなくなって、やせ衰え、ついには亡くなっていくっていう場面を目の当たりにした¹⁵。

この語りには、医療という制度的な枠組みのなかで「正しく機能している」現場に対して、制度の内側から抱握された言語化されにくい違和——「何かがおかしい」という抱握的違和¹⁶——が含まれている。それは明確な理念や理論ではなく、医療機関で隔離された患者の姿や心に浮かんでくる家族や親族との関係の断絶を、同氏が身体的に感受した痕跡として表出している。それは「地域」という環境に埋め込まれた与件であり、同氏にとってきわめて重要な倫理的な呼びかけとして抱握されていた。「地域」という場には、抱握の対象となり得る関係資本が地層のように積み重なって実在しており、それが出来事的創造性の生成の与件となり、常に交錯しているのである。

また、同氏は、職場の研修で地域分析に取り組んだ際、「自分が地域のことを何も知らなかった」という失望を覚えたという。

自分が老いた時、高齢者しかいない地域でどうやって生きていくんだろうという不安と、本当の医療ってこうあるべきじゃないのかという思いが、悶々としていた。

この語りは、構造的な「当事者意識」や「地域課題の理解」という語彙で表せるものではなく、生活者としての実存的な揺らぎである。同氏が直面したのは、自らの生活と切り離せない未来への身体的・感覚的な問いであり、このような抱握の連鎖こそが、創造性の萌芽そのものと見なせよう。

これをやるなら、私は病院をやめて、地域に行かないといけない。「受け入れる場所」から、アウトリーチする側の方にシフトしなければいけないってすごく思った。

この決意において重要なのは、それが論理的決断ではなく、倫理的応答としての使命感であるという点である。その背景には、「自分の課題を乗りこえるきっかけになるという変な確信」があったという。同氏が語る「確信」は、制度的なインセンティブや到達目標によって動機づけられる合理性を超えた「呼びかけへの応答」として生成されたものである。この創造性は、言語化される以前に身体的次元で生起する創造性の端緒である。もし同氏にその抱握的違和が立ち上がらなければ、その決意は生成しなかったであろうという反事実的思考から、地域という環境からの倫理的呼びかけは、不可視の実在層に潜むメカニズムとして捉えることができる。

初回の講座で同氏が抱握した「嬉しさ」も同質の応答であった。

地域のことを思っている人はたくさんいるんだという嬉しい気持ちになった。

この感覚は、課題意識の共有という認識論的な喜びを超えて、共にいることの抱握が、すでに存在していた関係性に新たな意味と応答の余地を拓き、講座が始まる前の段階から、関係の網の目の中に創造性の土壌が育まれ始めていたと解釈することができる。ここで記述可能となる生成の過程は、個人の語りから得られたものではあるが、その創造性は個人に還元されるものではなく、むしろ関係における応答として記述されるべきものであり、ここに応答的記述の可能性が見出される。

本項で浮かび上がったことは、A 氏が制度的な枠組みに参加する以前に感受していた違和や危機感、そして他者との共鳴を通して立ち上がった創造性の萌芽である。これらは、構造的分析からはこぼれ落ちてしまう潜在的実在が、創造性の生成メカニズムとして作用するプロセスを示唆するものである。次項では、講座受講中に A 氏が経験した「絶望」の語りを通じて、創造性がいかに失敗や不安と結びつきながら再生成されていくかを確認する。

3-3-2 変容の契機としての場の倫理——創造性を育む関係のケア

A 氏にとって、講座の受講は想像以上の困難を伴うものであった。専門用語や抽象概念が飛び交う講義内容についていくために、日々の仕事と子育ての合間を縫って、ほぼすべての時間を学習に費やす日々が続いたという。

とにかく意味がわからなかった。追いつくのに精一杯で……本当に寝ても覚めても頭の中の 9 割が講座のことで、ずっと睡眠不足だった。

この語りから読み取るべきは、単なる理解不足という表層的な困難ではない。むしろ、学術的語彙との接触によって自己理解の枠組みが揺さぶられ、語りえぬ混乱の只中にあること自体が、創造性の起点として作用していたのではないかという仮説を導き出すことができる。

さらに、講座の最終段階である事業企画の発表の準備過程において、同氏は「こんなのでは世界は変わらない。くらいの絶望」を感じたのだという。この「絶望」は、単なる挫折ではなく、自己の変容を引き起こす決定的な契機となった。限られた時間のなかで、仲間たちとの対話を通して再構成された事業構想と、同氏の倫理的使命感に支えられた熱意によるプレゼンテーションは高い評価をもって迎えられた。その創造性の生成をもたらしたのは、同氏自身がその絶望を抱握し、絶望しているということを自己開示するという応答によるものであったと捉えることができる。ここで記述されたような「揺さぶられ」の抱握は、創造性が生成する一つの閾値と見なすことが可能である。

あの時はまだ、きちんとやったものを出さないといけないとか、失敗しちゃいけないと思っていた。ダメだったら変えればいいじゃんっていうマインドがまだできてなかった。今だったら、まいか、と思える。

この語りに表れているのは、成果へと向かう直線的な思考から脱し、応答と変容を肯定的に受け入れられる柔らかな自己の獲得である。こうした変容自体も、予期しない出来事への応答を通じて自己を再創造するという生成過程と捉えることができよう。そして、その創造は、以下のように他者との相互承認によって支えられたものであった。

情熱をもって失敗しにいくのは、悪いことじゃないっていうこと、形になってなくてグズグズでも、きちんと受け入れてもらったことが、自分にとって有り難かった。

この学びの場を、同氏は自らの専門性を通してこう表現する。

何を言っても受け入れてもらえるという体感がすごくあった。……医療福祉の利用者さんの安全を守るっていうケアにすごく通じている。……これは素晴らしいケアじゃないかと思った。

この言葉から浮かび上るのは、表面的な成果や評価を超えた「場の倫理」の発見である。同氏の語りは、創造性が特定の能力や目標に還元されるのではなく、倫理的な関係性のなかで立ち現れてくるものであることを示している。そこでは「失敗」や「未完成」であることが排除されず、応答可能性に開かれた関係が保たれている。この倫理的関係性こそが創造性発露の基盤をなしているのである。

本項で確認してきたように、創造性は個人に属する能力ではなく、関係を通じて媒介的に育まれるものである。同氏の創造性は、構造的枠組みでは捉えにくいかたちで生成されており、そこには常に複数の生成的契機が潜在的に存在している。次項では、そのような関係が同講座修了後の社会的実践にどのように展開し、「共鳴」や「発火」といった現象として表れるのかを探究していく。

3-3-3 共にあることの力——関係的発火と潜在的実在の条件

講座修了後、A 氏は自ら構想した事業を実際に立ち上げた。ときを同じくして、同島の取り組みが報道番組で紹介されることとなった際、事業を実践しながらコーチとしても貢献する同氏に取材依頼があった。「前に出たら、いろいろ言われそうで嫌だな」と感じながらも、「誰かの役に立てるなら」と同氏は取材を受け入れた。

小さな積み重ねの先に、地域が抱える問題が解決できるんじゃないかな¹⁷。

前節で述べたように、同氏の事業は想定通りに進んでいなかった。しかし、そのことを語る同氏から、失望感や悲壮感は感じられなかった。むしろ、応答と省察を繰り返すことによって実践知が深められていくことに手応えを感じているようにすら見受けられた。

思った通りやれていなくても、実際に引き続き自分が活動を継続していくことになって……活動の一つ一つが繋がっているんだということがわかった。

この語りは、実践の結果ではなくプロセスから創造性が育まれることを、認識ではなく経験知として内在化させていることを示している。

同氏はこの時期、その活動実績と地域に貢献しようとする姿勢から、仲間に対して勇気と安心感を与えるような存在になりつつあった。しかし同氏は、常に自分が役に立てているのかどうか半信半疑であり、コーチとしての立場についても「大変恐縮した気持ちでいた」のだという。外部からの評価と自己評価の間に葛藤を抱えるなか、次年度には同氏に講師就任の打診があり、同氏はこれを快諾している。コーチの役割にさえ躊躇していた同氏に、いったい何が講師としての依頼を引き受けさせたのだろうか。

今回はいよいよ島の人が創り出す講座が始まる感じがしていて。サポートにならないかもしれませんけど、

フェーズが変わる段階。がんばらなきやつて。

この語りからは、講師という制度的な立場が対象化されているのではなく、同事業の過去の痕跡から、まだ見ぬ未来の仲間に至るまで、重層的な関係性のなかで立ち上がった呼びかけに対する、真摯かつ倫理的な応答として役割を引き受けていたことが読み取れる。単に「講師就任」と構造的に記述するだけでは、この応答のなかで立ち上がる創造性の生成過程、すなわち、潜在的実在によって支えられた関係のメカニズムをすくい取ることは難しい。

来年なのか、5年後なのか、いつ、どのタイミングで発火するというのがわかんないなって思っている。つながりあって、応援し合うのは大事。……誰かががんばっていると、自分もがんばれる。誰かの小さいがんばりがたくさんあって、それを見ている人が、今ならやれるっていうタイミングで発火できたらいい。

この語りにおける「発火」という表現は、同氏が直観的に用いた感覚的なメタファーである。それは、他者の実践の痕跡を抱握し、その共鳴が内奥で灯をともすかのように、新たな行為を誘発していく過程を捉えている。誰のものであるかに限定されないその「火」の生成は、関係の網の目のなかで連鎖的に立ち上がる瞬間を象徴している。同地域における創造性は、特定の事象による直接的な因果関係ではなく、共鳴を通じて非同期に伝播していく動的な出来事として生じているのである。

約束は破っていい。これをすると言ったけど、やっぱりできなかつたっていうことをやっていい。目指しているのは、共鳴・共創できる幸せな地域づくり。

同氏の語りは、制度的な評価や到達点のある成果目標を超えた、倫理的実践の地平を指し示している。共にあることの力は、行動によって得られる直接的な成果ではなく、応答し続ける関係性の継続そのものである。それはまさに、鶴見のいう「共通の紐帯を生み出す場」と重なり合うものであり、創造性を支える潜在的実在としての基盤的土壤なのである。

本節での記述は、語りを構造的に整理するのではなく、その発せられた文脈や、言葉の背後にある非顯在的な契機に注目し、創造性の生成過程を応答的に探究する試みであった。応答的記述とは、あらかじめ準備された枠組みに語りを当てはめることではなく、記述者自身が関係のなかに参与し、共に生成していく創造的な営みである。この営みの意義は、構造的記述ではこぼれ落ちてしまう創造性の痕跡をすくい上げ、出来事として立ち現れる創造性に応答する点にある。その一方で、記述者の解釈が関係に影響を与えるという意味において、記述とは創造的かつ倫理的な姿勢が問われる営みであることも、留意し続けられる必要がある。

おわりに

本稿は、地域実践における創造性を、個人の資質や成果ではなく、環境との応答的関係のなかで立ち現れる生成的過程として捉え直すことを目的としてきた。市井および鶴見によるキー・バースン概念の哲学的・倫理的視座を起点に、創造性を潜在的実在として捉える生成論的転回を提起し、記述行為そのものを応答的で倫理的な営みとし

て再構成することを試みた。

本稿の学術的意義は、第一に、創造性を静的な属性ではなく関係の網の目の中から立ち現れる出来事的過程として捉え直した点にある。これにより、内発的発展論におけるキー・バースンの英雄化傾向を内側から転換し、地域の創造的実践を特定個人の物語ではなく、関係的応答の連鎖として描く可能性を示した。

第二に、創造性を批判的実在論の三層構造における潜在的実在として位置づけたことである。これにより、観察や語りの背後で作用する生成の契機をアプダクションおよびリトロダクションの推論を通して分析し、経験的現象の水面下に潜む創造性発露のメカニズムに近接する方法を提示した。

そして第三に、ホワイトヘッドおよびステンゲルスの哲学をメタ理論とし、記述行為そのものを創造的出来事の一部と見なす応答的世界観を導入した点である。記述は単なる観察や分析ではなく、他者との関係のなかで共に意味を生成する倫理的実践であり、創造性はその関与のなかで生成する出来事として認識される。

応答的記述において重要なのは、記述者が対象を外部から分析するのではなく、出来事の網の目の中から巻き込まれながら、意味を共に構成していく立場を引き受けることである。そこでは、「揺さぶられ」や「絶望」といった否定的経験が、他者との関係を媒介として新たな意味へと変容し、創造性の端緒となる。すなわち、創造性とは特定の人物に属する能力ではなく、場の倫理に支えられた関係のうちに立ち上がる出来事である。記述者は、その生成過程をただ追うのではなく、自らの推論の痕跡と関与の過程を可視化する責任を負っている。この倫理的な応答こそが、記述を創造的営為へと転化させるのである。

一方で、本論にはいくつかの課題も残されている。まず、本研究は単一の地域フィールドに基づく厚い記述を土台としており、一般化には慎重さを要する。そのため本論は、普遍的な理論化を目的とするのではなく、生成論的視座に基づく試論的研究として位置づけられるべきである。

また、参与を伴う応答的記述においては、研究者の介入と解釈が同時進行するため、その過程をいかに可視化するかが常に課題となる。今後、事例分析をより広く展開していくためには、信頼性と倫理性を両立させる方法論的発展が求められる。そして地域という高密度な関係社会においては、匿名性と可視化の緊張関係を常に意識し、説明と同意形成の手続きを倫理的配慮のもとで徹底する必要がある。

これらの課題を踏まえつつ、本論で提起した生成論的転回および応答的記述の枠組みが、異なる地域や実践領域において適用され、潜在的実在としての創造性の発露に関する普遍的構造をより深く探究する試みへと接続されることで、地域社会研究および地域における内発的な社会変動を支える実践の広がりに資することを期待したい。

参考文献

【英語文献】

- Stengers, Isabelle. (2011). *Thinking with Whitehead: A Free and Wild Creation of Concepts*, Translated by Michael Chase, Harvard University Press.
- (2023). *Making Sense in Common: A Reading of Whitehead in Times of Collapse*, Translated and with an Introduction by Thomas Lamarre, University of Minnesota Press.

【日本語文献】

- 市井三郎 (1963) 『哲学的分析』岩波書店。
- (1980) 『ホワイトヘッドの哲学』レグルス文庫。
- 上田敏・鶴見和子 (2003) 『患者学のすすめ—“内発的”リハビリテーション』藤原書店。
- 北野収 (2008) 『南部メキシコの内発的発展と NGO—グローカル公共空間における学び・組織化・対抗運動』勁草書房。
- 北野収・西川芳昭編著 (2024) 『人新世の開発原論・農学原論—内発的発展とアグロエコロジー』追補・新装版、創成社。
- 佐竹真明 (1998) 『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論—鍛冶屋と魚醤』明石書店。
- 玉野井芳郎 (1979) 『地域主義の思想』農山漁村文化協会。
- 鶴見和子 (1996) 『内発的発展論の展開』筑摩書房。
- (1997) 『鶴見和子曼荼羅III知の巻—社会変動と個人』藤原書店。
- (1998) 『鶴見和子曼荼羅IV土の巻—柳田国男論』藤原書店。
- 鶴見和子・川田侃編 (1989) 『内発的発展論』東京大学出版会。
- 鶴見俊輔・花田圭介編 (1991) 『市民の論理学者・市井三郎』思想の科学社。
- ティム・インゴルド (2023) 『応答、しつづけよ。』奥野克巳訳、亜紀書房。
- 西川潤編 (2001) 『アジアの内発的発展』藤原書店。
- バース・ダナーマーク、マツ・エクストローム、リセロッテ・ヤコブセン、ジャン・Ch・カールソン (2015／2024) 『社会を説明する：批判的実在論による社会科学論』佐藤春吉監訳、ナカニシヤ出版。
- 松島泰勝 (2002) 『沖縄島嶼経済史——一二世紀から現在まで』藤原書店。
- 米川安寿 (2018) 「内発的発展論における主体性に関する考察—自己実現の人間としてのキー・パースン」『ボランティア学研究』第18巻、99-112頁。
- ロイ・バスカー (2009) 『科学的実在論の理論』式部信訳、法政大学出版。

¹ 終戦直後から哲学者としての市井と歩みをともにした鶴見俊輔は、市井が自らの哲学的諸問題を考えるための最初の手がかりを与えたのはホワイトヘッドであると指摘している（鶴見・花田, 1991, pp.204-205）。

² 本稿でいう「構造的記述」とは、外在的観察・類型化・時間の均質化などを通じて、実践を一定の構造として可視化しようとする作業上の定義である。これに対置される「応答的記述」とは、参与と相互行為に立脚し、出来事の立ち上がりと関与の倫理を可視化しようとするものである。

³ 市井三郎は「キー・パースン（複数）」として、意図的にその複数性を明記している（市井, 1963, p.36）。

⁴ 鶴見は「定住者」「漂泊者」「一時漂泊者」を社会変動の分析枠組みとして使うことに着目したのは「柳田国男の仕事を通してである。」と注釈している（鶴見, 1996, p.31）。

⁵ この「応答的世界観」という用語は、本稿独自の表現であるが、ステンゲルスがホワイトヘッド哲学とともに考え、

実践的展開を施した思想的射程を要約するものとして用いる。

⁶ 市井（1963）はその思考方法について、「反事実的条件命題」として2つの節をあてて論じるほどに重要視していた。

⁷ 著者は対象となる地域において10年以上居住しており、また対象とする事業およびその構成メンバーとは2021年の事業開始当初より活動を共にしている。

⁸ 北野は「キー・パーソン」と表記しているが、本稿では「キー・バースン」に統一する。

⁹ 対象となる基礎自治体は鹿児島県大島郡与論町となるが、本稿では生活者の共同体としての「地域」という概念に重きをおき、為政者によって変更される行政区域としての「与論町」ではなく「与論島」という名称を用いることとする。

¹⁰ 2025年7月現在、同事業は実行委員会形式で運営されており、委員会規約の「第2条（目的）」において、「地域の活性化及び発展に貢献する人材を育成すること」が目的として明記されている。

¹¹ 本論における事例分析は、インタビューの実施およびその記述の目的と公開範囲を共有・同意を得た上で、信頼関係に基づき構成している。また、再構成された記述についても本人の確認を得たものである。語りや行為の記述は可能な限り個人が特定されないよう留意しているが、島嶼地域という特性上、関係者が特定されうる可能性についても事前に説明し、本人に内容の確認・了承を得たものである。なお、本研究は筆者の所属機関における研究倫理指針に準拠して実施しており、すべての記述はその理念に基づき、調査対象者との相互の信頼と応答の関係のもとで構成されている。

¹² A氏への定式的なインタビューは2024年9月11日、同氏が講師を務める人材育成講座の内容を検討するための会議の後、約90分間に渡って行われた。しかし、本論における記述の素材はこのインタビューによるものに限らず、長期の参与によってもたらされた気づきも多分に含まれている。

¹³ 市井は、能動的諸主体の中で「対立的契機をいたずらに増大させることによって相殺の帰結を招くような方策はとらず」、それぞれの対立勢力が役割を果たしつつ、全体として彼らの未来のイメージの方向へ動く方策を「変革方法論」と規定し、キー・バースンの要件として位置づけた（市井, 1963, pp.45-49）。市井に対し、鶴見が創造性を日常的な変化の中に見出そうとした視座から捉えれば、同氏の事業実践におけるアプローチは、キー・バースンの変革方法論として位置づけることができる。

¹⁴ 分析対象は前節と同じA氏への半構造化インタビューおよび参与観察による。

¹⁵ これらの直接引用は、2024年9月11日に行われた聞き取りにおいて語られたものである（以下、特記のない引用についても同様）

¹⁶ 言語化以前の微細な感覚を表すため、あえて「違和感」ではなく「違和」と表現した。

¹⁷ NHK (2022) 『情報 WAVE 鹿児島』 NHK 鹿児島、2022 年 11 月 30 日放送の A 氏インタビューより。